

BIRD RESEARCH NEWS

2015年4月号 Vol. 12 No. 4

活動報告 音でバードストライクを防げる？

参加募集 コアジサシ営巣調査参加者募集！

参加報告 East Asia Land Bird Monitoring Workshop

参加報告 日本生態学会鹿児島大会

生態図鑑 オーストンオオアカゲラ

お知らせ 新人スタッフ紹介

図書紹介 ハトはなぜ首を振って歩くのか



Photo by Yoshiro Watanabe

活動報告

音でバードストライクを防げる？ ワシの音に対する反応を試験

植田睦之

北海道では風車にオジロワシが衝突するバードストライクが問題となっています。この問題を軽減するための方策として、様々なことが検討されていますが、その1つに画像認識やレーダ認識などでワシが風車に接近するのを感知するというものがあります。「ワシが近づいたら風車を止めてしまおう」というのがバードストライクを一番確実に防げる方法ですが、そうすると発電効率が下がってしまいますし、機械的に負担もかかり、事業者は嫌がりそうです。もう少し「風車に優しい」方法として、ワシが近づいた時に音を出して、風車から追い払うか風車に気づかせる方法が考えられます。

そこで昨年に続き、今年も根室の福田佳弘さんと高田令子さんに協力していただいて、環境省の「海ワシ類における風力発電施設に係るバードストライク防止策検討委託業務」のなかでワシの音に対する反応を実験しました。その結果をご報告します。

ワシは逃げはしないが、注目はした

何を鳴らしてワシの反応をみるか、最初に思いついたのは、農地で鳥追いに使われている爆音機です。しかし、メーカーに聞くと、鳴らすためにスイッチを押してから、実際に音がでるまで、1分くらいタイムラグがあるということでした。これでは、ワシが近づいてきたらと思って、スイッチを入れても、鳴ったのは通過後、ということになりかねません。

そこで、運動会のスタートに使うピストルを使うことにしました。スタータピストルの音は校庭で聞くとかなり大きい音に聞こえますが、試しに野外で鳴らしてみると意外に小さな音。やや不安を感じながらも、2月23日と24日、根室半島のオジロワシやオオワシがよく飛ぶ崖の上に陣取り、彼らが

近づいてきたらピストルを鳴らす実験をしました。音に驚いて引き返すことは稀でしたが、多くは羽ばたいて上昇したり、スピードを落としたりしました。また、その際には音の方向を見る行動が観察されました。

何度かワシが反応しないケースがありましたが、これらはワシの後方から音を鳴らした場合でした。ワシの耳の構造上、後ろの音はあまり聞こえないのか、それとも後ろで起きていることは気にしないのか。なぜなのでしょう？



写真. ピストルの音に反応するオジロワシ。

Photo by 福田佳弘

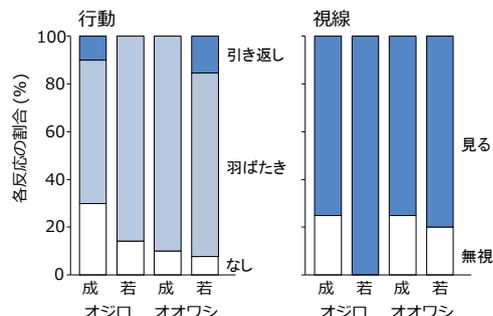


図. スタータピストルの音に対するオジロワシとオオワシの行動と視線。

バードストライクを減らすために

ワシは通常、風車を避けて飛んでいるので、視界が悪いのか、あるいは食べ物や他個体に気をとられて風車を見ていないといった場合に風車に衝突してしまうことが考えられます。今回の調査から、ワシが近づいた時に音を鳴らすことで、ワシに風車の存在を気づかせて風車を避けさせ、バードストライクを減らすことが期待できます。ピストル以外にクマよけのホイッスルへの反応も試しましたが、音の大きさはピストルと同じか大きいように感じたにもかかわらず、ピストルほどは反応しませんでした。音の大きさだけでなく質も反応に影響すると考えられます。さらに情報を蓄積して、効果的な方法を検討していきたいと思います。

参加募集

コアシサシ営巣調査参加者募集！

奴賀俊光

大都会東京の、コンクリートの施設の屋上に、絶滅危惧種コアシサシの集団営巣地があります。この貴重な営巣地のコアシサシを守るため、ボランティア調査員の募集がありますので、お知らせします。ボランティア調査員として実際に調査に参加すると、コアシサシの営巣環境やちょっと変わった繁殖生態についても学ぶことができると思います。都心でたくましく生きる絶滅危惧種を間近に感じることができる良い機会ですので、参加してみたい方はぜひご参加ください。

コアシサシの集団営巣地があるのは、東京都大田区、森ヶ崎水再生センターの屋上です。2001年にコアシサシの営巣が確認されてから、NPO法人リトルターン・プロジェクト(以下LTP)が、屋上で営巣するコアシサシの保全活動を行っており、毎年、営巣調査参加者を募集しています。



写真1. 森ヶ崎水再生センターで生まれたコアシサシのヒナ。地面には白い貝殻がまかれています。(リトルターン・プロジェクト提供)

営巣調査を通して得られた知見は、よりよい営巣環境の整備に活かされます。例えば、コアシサシは白い地面に好んで営巣する傾向が見られたため、営巣地に白い貝殻をまいたところ、貝殻をまいた地面でより多くのコアシサシが営巣しました(写真1)。また卵やヒナの天敵であるカラス対策(写真2)等も行っています。10年以上にわたるLTPの活動が実を結び、2014年の調査では810巣、孵化したヒナの数は約1400羽となりました(図)。昨年の繁殖の盛況振りから、今年もたくさんのコアシサシが営巣してくれるだろうと期待されています。



写真2. カラス対策。その名も「いやがらす」。右は設置したところ。(リトルターン・プロジェクト提供)

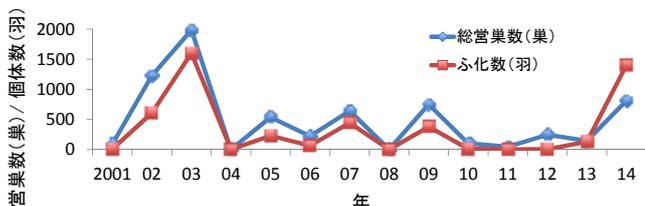


図. 2001年から2014年までの営巣数、孵化数の経年変化。(リトルターン・プロジェクト提供)

リトルターン・プロジェクト コアシサシ営巣調査参加方法

■参加条件

- コアシサシへの配慮事項、注意事項の厳守
- 2回行う講習会のうちどちらか1回に参加すること(昨年以前の営巣調査を経験した方は、講習会は免除)
- 期間中に3回以上調査に参加できること
- 中学生以上の健康な方(中学生は保護者同伴)

■日時

調査講習会

第1回:5月10日(日) 10-12時

第2回:5月30日(土) 11-13時

▶ 去年の講習会の様子。一列に並んで歩きながら、ウズラ卵を地面に置いてコアシサシの巣(卵)を探す練習中。(リトルターン・プロジェクト提供)



■営巣調査(各日)

13:30-18:00ころ)

5月16日(土)、24日(日)、30日(土)

6~8月は、毎月第1第3日曜日と第2第4土曜日

■場所

東京都大田区昭和島2-5-1

森ヶ崎水再生センター東施設屋上

(最寄駅:東京モノレール昭和島駅)

■申し込み方法

参加を希望される方は、LTPのブログに申し込み方法や詳細情報が掲載されていますので、下記URLのブログをご覧の上、掲載の方法でお申し込み下さい。

<http://d.hatena.ne.jp/littletern/20150507>

参加報告

East Asia Land Bird Monitoring Workshopに参加してきました

植田睦之

2015年3月25～26日にBirdLifeと韓国の自然環境部局主催で行なわれた東アジアの陸鳥モニタリングについてのワークショップに参加してきました。

水鳥についてはアジア水鳥センサスのようなモニタリングや渡り鳥フライウェイ事業による情報交換の場などがありますが、陸鳥についてはそういったものはありません。そこで、今回、ロシア、中国、韓国、日本の関係者が集まり、ヨーロッパでのモニタリングのとりまとめ役をしているRSPBのGregoryさんにもアドバイザーとして参加してもらい、情報交換と今後についての検討が行なわれました。

各国からの報告で共通していたのはシマアオジの減少



写真. モニタリングサイト1000や来年から行う繁殖分布調査について話をしました

でした。特に、ロシア西部では絶滅してしまったそうです。もともと東アジアの鳥だったのが、西へ分布を広げていった鳥なので、全体の個体数の減少とともに、分布の端では絶滅してしまったのでしょうか。同様の分布パターンをもつカシラダカもロシア西部で急激に減少しているそうです。日本の標識調査でも標識数が急減しているの、今後の動向に注目し、減少の原因などを明らかにしていく必要があります。また、日本では最近スズメの減少が話題になりましたが、スズメは韓国でも減少しているという報告がありました。日本との状況の比較などから減少の主原因を明らかにできるかもしれません。こういった点も各国で情報交流をしていく利点だと思います。

今後の情報交換やモニタリング体制については、まずは各国共通で行なわれている標識調査データでのモニタリングを検討してみようということになりました。バードリサーチが主に取り組んでいる観察データによるモニタリングについては、体系的なデータがあるのは日本と韓国だけで、ロシアでは自然保護区等にデータはあるものの集約されておらず、中国では行なわれていないようです。しかし中国では、「野鳥の会」が各地にできるなど、バードウォッチングが盛んになってきており、BirdLifeのシンバさんが中心になって、そういった団体の人たちでセンサスをする 것도検討され始めています。近い将来、東アジア各国のセンサスデータをもとに鳥の現状や減少増加の原因を推測することができるようになるかもしれない、と感じました。

参加報告

日本生態学会鹿児島大会に参加してきました

守屋年史

3月18～22日に鹿児島大学で開催された日本生態学会大会に参加してきました。3月20日午前、環境省生物多様性センターと大規模長期生態学専門委員会の企画集会「モニタリングサイト1000の10年の成果から分かったこと～大規模長期生態系モニタリングの継続と取得データの活用を進めるためには～」が開かれ、バードリサーチが関わっているガンカモ類、シギ・チドリ類の調査について、10年目の成果や活動状況を発表しました。

そもそもモニタリングサイト1000とは、国内の約1000か所の様々な生態系を長期(100年!)にわたってモニタリングする事業です。この企画集会では、まず環境省生物多様性センターからモニタリングサイト1000の概要の説明があ



り、続いて自然環境研究センターによる森林・草原調査の報告、日本自然保護協会による里地調査の報告、バードリサーチの報告、そして日本国際湿地保全連合による沿岸域調査の報告があり、さまざまな生態系におけるモニタリングの成果が発表されました。

モニタリングサイト1000の調査は、研究者による調査と市民が協力する調査の大きく二つに分けられます。例えば、森林・草原調査などは、大学や研究機関と連携し、詳細な分析をおこない多くの研究成果を挙げていました。一方、市民ネットワークに重点を置いた里地調査は、自然環境だけでなく里山の文化や人のかかわり合いも含めた記録を残そうとしており、保全への活用を見据えた調査を継続しています。多彩な人がかかわり、さまざまなアイデアを加えながら展開していけることが市民調査の利点だと思います。沿岸域調査では、東日本大震災の前後の比較や経過についての発表がありました。震災前から広く継続的に見ていたことで地震や津波が自然に与える影響が観測できており、地域によって震災後の影響や回復の状況が異なっていました。非常に貴重なデータだと思います。私達は、市民による調査の結果を研究者が解析した結果について発表しました。調査の成果がレッドリスト種の選定に反映されたことや、ラムサール条約における水鳥の生息基準に照らして整理した結果についても話をしました。

市民調査と研究者がおこなう調査、それぞれの特徴を活かしながら、あと90年、自然環境の変化を見守り続けていければと思います。

オーストンオオアカゲラ 英: Amami Woodpecker

1. 分類と形態

分類: キツツキ目キツツキ科

露出嘴峰長:	♂ 37.1-43.2mm(15)	♀ 35-38.5mm(11)
ふ趾長:	♂ 25.2-29.95mm(16)	♀ 27.7-30.3mm(11)
自然翼長:	♂ 149-161mm(17)	♀ 147-152mm(13)
尾長:	♂ 100-116mm(15)	♀ 92-110mm(8)
体重:	♂ 152.3g(n=1, 2002/1/14 湯湾岳)	

※()内は計測個体数。山階鳥類研究所(14), スウェーデン自然史博物館(7), 故・小林圭介氏所蔵(4), 森林総合研究所(3), 国立科学博物館(1)の科学標本および野生個体(♂1)の成鳥の計測値。一部の測定値は破損等により無い。尾長は、標本は中央尾羽付け根から、生体は油脂腺後端から羽端まで。

羽色:

全体に黒く、くちばしの付け根から目の下と後ろまで、首筋の両側、喉と胸中央の上部は褐色にくすんだ白。背面はほぼ黒く、風切羽にのみ白い斑点が散在する。胸の両側は黒く、腹との間に白っぽい羽毛が混じる。腹から尻はくすんだ赤。オスは額から後頭まで赤く、メスは黒い。尾羽は黒く、外側の2~3枚には大きな白斑がある。他のオオアカゲラに比べて全体に暗色。巣内ビナの羽色は未確認であるが、巣立ち後の若鳥頭部分はアカゲラと同様に雌雄ともにうっすら赤く、オスの赤い部分の方が少なくとも同じ腹の中では大きいと思われる。



写真1. オーストンオオアカゲラのオス。
Photo by 高美喜男。

鳴き声:

キョツの声を頻繁に発する。同種他個体との接触で緊張関係の状態にあるときには、キュキュキュキュ、あるいはキュトキュトキュトなどと聞こえる甲高い連続した声を発する。また連続的に叩いて音を発するドラミングを行う。採食のためではなく、弱くゆっくりと単発的に叩いて音を出すこともある。成長した巣内ビナは大声を発する。巣内ビナの声は緊張時の成鳥の声に似るがやや低音。

2. 分布と生息環境

分布:

奄美大島のみで繁殖する。最短で約1km離れている加計呂麻島での繁殖記録はなく、ごくまれに食痕や観察記録がある。オオアカゲラ類はアカゲラより南の、主に広葉樹林帯に広く分布している(図1)。

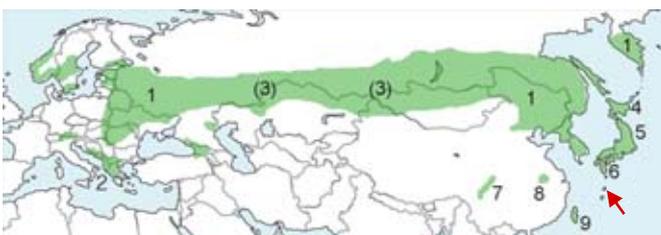


図1. オオアカゲラの亜種の分布。日本列島、東アジアに多くの変異が認められる(バードライフインターナショナルホームページ等をもとに作図)。日本産亜種4, 5, 6は、それぞれ亜種エゾオオアカゲラ、オオアカゲラ、ナミエオオアカゲラ。矢印は奄美大島(オーストンオオアカゲラ)。

生息環境:

照葉樹天然林、リュウキュウマツの混じる二次林に生息する。海岸の急傾斜地に発達する風衝低木林、林縁部でも観察される。奄美大島北部の笠利半島では若齢二次林が多かった1990年代には観察頻度が低かったが、樹木が成長した2000年代には常に観察されるようになった。

生息密度:

2004~2014年に実施した、3月後半に金作原国有林と湯湾岳自然保護区の約2kmの林道を歩く調査では、毎年2~3個体が確認されている。1999年から奄美野鳥の会が実施している、3月後半の約41km区間の奄美中央林道における調査では、1kmおきに配置された調査員が夜明け前後にそれぞれ2km区間を1時間調査し、30個体前後が記録されている。筆者が通っている埼玉県秩父の落葉広葉樹林帯にある標高1000m前後の林道沿いでは、3km余りの範囲で毎年2~3個体のオオアカゲラがドラミングしており、それに比べるとやや高密度である。

3. 生活史



繁殖システム:

一夫一妻で、少なくとも繁殖期にはなわばりを構えていると推定される。なわばり活動の一部でもあるドラミングは3~4月に頻度が高く、9~2月にも行われる。

巣:

主に照葉樹天然林で繁殖し、比較的心材腐朽木も多いと考えられるスダジイの壮齢~老齢木の幹に、自ら穴を穿って営巣する例が多い。天然林内のほか、林縁部や民家の庭木などでも営巣するが、成長した巣内ビナは大きな声を頻繁に出すため発見されやすく、開けた場所の巣立ちビナはハシブトガラスやノネコ等に捕食されやすいと考えられる。

その他:

卵の形状、一腹卵数、ヒナ数、抱卵・育雛期間、巣立ち率等の繁殖習性や繁殖成績に関する情報は無い。北海道やユーラシア大陸のオオアカゲラでは、抱卵期間が2週間程度、巣内育雛期間が4週間程度である(Matsuoka 1979)。本州東部~北海道のオオアカゲラは同地域の他のキツツキ類や大部分の森林性鳥類よりも早く繁殖することが知られているが、本種は奄美大島の他の大部分の森林性鳥類と同時期に営巣している。西日本のオオアカゲラ類の繁殖季節の情報は無いが、日本列島では全国でほぼ同じ時期に繁殖している可能性がある。

4. 食性と採食行動

直径10cm程度以上の、比較的太い枯れた枝や幹で採食することが多い。くちばしで叩いて採食木を砕き、崩して採食する。巣のヒナへの給餌と採食行動の観察により、カミキリムシやチョウ等の幼虫やゴキブリ、モリバッタ等の昆虫類、オオゲジやムカデなどのムカデ類、クモ類、タブノキやタラノキ等の植物の種子、果実、タンカン等を食することが確認されている。

学: *Dendrocopos (leucotos) owstoni*

生態図鑑

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 松枯病の蔓延

奄美大島では、2006年頃に隣接する加計呂麻島から伝搬した北米原産のマツノザイセンチュウによるマツ材線虫病が全島に広がり、リュウキュウマツの枯木が大量発生している。その枯木で本種やコゲラ、ルリカケス等が採食しており、本種の営巣も確認されている。このように食物資源が豊富な状態が数年間生じているが、明らかな個体数増加は見られない。なわばりを維持する習性や後述する森林の分断化などが制限要因となっている可能性がある。

● 森林分断が固定

奄美大島では、群島振興補助金が製紙チップ材生産にも投じられて、1980年代までの30年間に天然林の伐採が進み、1990年代後半からは伐採量は低下したものの、林道等の整備は現在まで続いている。距離当りの工事単価を重んじ大型重機で道路が開設されるために、広い舗装道路が森林を恒常的に分断し、林道上の樹冠は切れ、深い排水側溝はイモリやカエル等小動物の移動を妨げ、死亡率を高めている。落枝や法面崩落等によって一時的に分断は解消されるが、道路整備により分断状態は島全体で維持され、風が通り元来の森林内湿度が維持されず生態系に変化が起きている可能性がある。ハシブトガラスやノネコ等外来の捕食者や、人の移動増加に伴う外来植物等の林内侵入を林道が促していることも危惧される。

燃料に薪を使わず、肥料に柴を使わず、山の幸が生活必需品でなくなり、木材生産も減った。資源としての樹木の利用が少ない社会が20年程続いて、生息地の森林環境が改善し、オーストンオオアカゲラの個体数や分布は一時的に回復傾向にあると考えられるが、分布が1島の1集団に限られることや、比較的生息密度の低い中型の鳥類であることから、絶滅の危惧は常にあるといえるだろう。

● 独立種！

オーストンオオアカゲラは、Ogawa(1905)によって *Picus owstoni* として記載された後、オオアカゲラの1亜種と再定義されたが、2014年に発行された世界の鳥のハンドブック別冊のチェックリスト(Hoyo & Collar 2014)で、他個体群とは羽色等の形態差が不連続に大きいことを重視して独立種と定義する考え方が採用された。

日本産3亜種、台湾産1亜種と、オーストンオオアカゲラの形態を標本を用いて比較したところ、オーストンオオアカゲラは、翼長と嘴長の比では本州以南、翼長とふ蹠長の比では台湾、翼長と尾長の比では北海道のオオアカゲラとの間で有意差がなかった。自然翼長、尾長とふ蹠長は統計的に有意に最も長く、嘴は北海道よりも有意に短く、本州～九州と同様だった。台湾産亜種は、いずれも有意に最小である(図2)。キツツキ類の嘴は太く短い方が固い木を掘るのに適し、尾は相対的に短い方がつつき力が出るなどの説もあり、こうした形態特性はそれぞれの採食生態を反映していると考えられる。

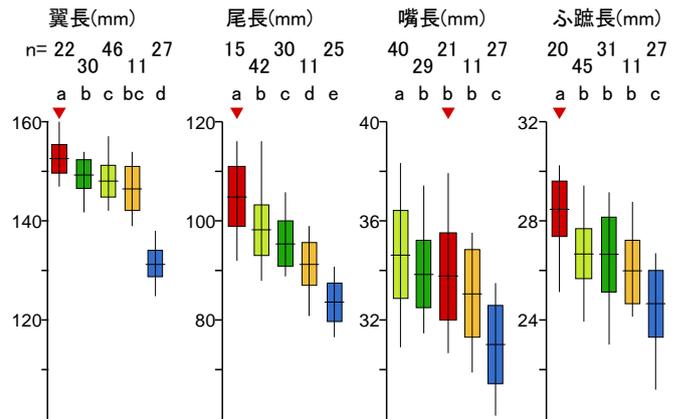


図2. オオアカゲラの日本列島3亜種(4, 5, 6)と台湾産亜種(9)とオーストンオオアカゲラ(●, ▼で示した)の標本計測値による形態比較。最大最小、平均±標準偏差を示した。上部の数字は計測個体数(n)。アルファベットは、同じ文字が示されている集団間には有意差がないことを示す(石田・樋口(1989)をもとに作図)。

6. 引用・参考文献

Hoyo, J. & Collar, N. J. 2014. HBW and BirdLife International Illustrated Checklist of the Birds of the World 1, Lynx, Barcelona.
 石田健・金城道男・村井英紀. 1989. オーストンオオアカゲラ *Dendrocopos leucotos owstoni* の分布, 生態および保護. 昭和63年度特殊鳥類調査: 89-124.
 石田健・樋口広芳. 1989. オーストンオオアカゲラ *Dendrocopos leucotos owstoni* の分類および形態. 昭和63年度特殊鳥類調査: 125-140.
 石田健・植田睦之・金井裕. 1994. オーストンオオアカゲラのドラミングにもとづく生息密度の推定. 1993年度環境庁稀少野生動物植物種等生息状況調査報告書: 69-74.
 石田健・植田睦之. 1995. 奄美大島におけるオーストンオオアカゲラの生息状況. 奄美大島希少鳥類生息状況調査報告書, 1994年度環境庁稀少野生動物植物種生息状況調査: 25-40.
 Matsuoka, S. 1979. Ecological Significance of the early breeding in White-backed Woodpecker *Dendrocopos leucotos*. Tori 28: 63-75.
 Ogawa, M. 1905. Notes on Mr. Alan Owston's collection of birds from the islands lying between Kiushu and Formosa. Annot. Zool. Japon 5: 175-232.

その他WEBサイト:

- <http://forester.uf.a.u-tokyo.ac.jp/~ishiken/japanese/amami/>
- <http://www.hbw.com/species/amami-woodpecker-dendrocopos-owstoni>
- http://www.onezoom.org/EDGE_birds.htm (最新情報を統合し更新中)

執筆者

石田健 横瀬町在住

学部と大学院で山中湖畔のキツツキ類の生態を研究していたご縁から、昭和63年度の環境庁特殊鳥類調査の本種を担当したのをきっかけに、ずっと奄美に通い続けている。スタジイのドングリの結実とルリカケスの動態を中心として、森林生態系の研究を行っている。今はほぼ中断状態のコゲラの研究を近々再開し、オーストンオオアカゲラについてもよく調べてみたいと思っている。



新人スタッフ紹介

奴賀俊光

大学では鳥類を専門とする研究室ではなかったのですが、ミュビシギの採食生態、インビヨドリの繁殖生態の研究や、海岸や水田の鳥類相調査等を行ってきました。社会人になってからは、仕事の合間にNPO法人リトルターン・プロジェクトでコアジサシの保全活動を行ってきました。仕事では陸域の建設コンサルタント会社で3年、海域の建設コンサルタント会社で5年働いてきましたが、もっと鳥類に関係する仕事に就きたいと思い、今月からバードリサーチに加えていただきました。



コアジサシやシロチドリ、ミュビシギなどの生息環境である砂浜海岸は、森林や干潟等よりも人気が無く(?)、知見も少ない環境です。そのような環境をフィールドとしてきた経験を活かし、砂浜という環境の情報収集・発信、希少種の保全にかかわる仕事ができればと思っています。

小島みずき(インターン)

小学生の頃に鳥や自然を見ることの面白さに魅了され、それからずっと鳥を追いかけてきました。大学で畜産学や野生動物管理について学ぶかわり、博物館で鳥の剥製や標本を作ったり、休日は野鳥の会東京主催のヤング探鳥会の解説員をしています。そんな中で一部の鳥が減少していることや一方で増えすぎて人の軌轢ができていくことに気付き、人と鳥が共存できるような社会を目指したいと思いバードリサーチへ来ました。



鳥は特に野外経験を積んでいなくても気軽に見られるという点もあり、ボランティアでも様々な調査に参加しやすいです。鳥の調査や研究のプロとは違い、アマチュアで鳥を見て楽しんでいる人たち(大学のサークルで鳥を見始めた人、近所で鳥を見ている主婦の方々など)を巻き込んで活動していきたいと思っています。よろしくお願ひします！

図書紹介

ハトはなぜ首を振って歩くのか

藤田祐樹 著/岩波書店 定価 1,200 円(税別)

出張でよく新幹線に乗ります。そして、窓の外の景色を眺め、通り過ぎる富士山、空を舞う猛禽、あっ！あの田んぼに群れるカラスは・・・ミヤマガラス！？

このとき僕の目玉は、自分で言うのもなんですが、とても器用に、そして正確に動いてくれます。だからもの凄い速さで通り過ぎる外の世界に焦点を合わせ、網膜にくっきりと見たいものの姿を映すことができます。なんと素晴らしい僕の目玉でしょうか。

鳥たちの目玉は僕の目玉のように美しい球形をしています。ラケットにあたった瞬間の軟式テニスのボールのように押しつぶされた形をしているので、目玉を動かして見るべき対象を常に視点の真ん中に捉えることができないのです。目玉を動かさない鳥たちは、どうやってものを見ているのでしょうか？

公園に出かけて、ベンチに腰かけて、ただただぼーっとする、という機会は意外とあるようでないのですが、一度やってみてください。目の前を通り過ぎるドバトが目に入ってくると、彼らの動きを見ていると、なぜか首を前後に動かしながら歩いています。歩く速度があがると、首を振る速度も速くなります。ちょっと不思議な行動です。この

行動に注目したのが藤田祐樹さんです。斬新な視点で展開される藤田さんの研究はとても面白く、バードリサーチニュース2006年3月号にも記事を寄せていただきました。その藤田さんの研究が、一冊の本になりました。

本書は、人の歩行と鳥の歩行の違いから、首を振って歩く鳥とそうでない鳥がいること、そしてなぜそのような違いが生じるのかなどについて、鳥の体の仕組みや生態の知識を織り交ぜながら推論を展開し、謎を解いていく探偵小説のように書かれており、テンポよく話が進んでいきます。藤田さんの文章はとても読みやすく、皆さんにもあるような体験を例え話として挟みながら、わかりやすく面白く解説されているので、多分野に渡る知識がすっと頭に入ってきます。じっくり鳥を観察する、調べることの楽しさを感じることができる1冊です。疲れた頭のリフレッシュにも、お勧めです。

【高木憲太郎】



バードリサーチニュース 2015年4月号 Vol.12 No.4

2015年4月27日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之 編集者: 青山夕貴子・高木憲太郎

表紙の写真: タシギ